

# 社会人

第28話

「蔵王いこいの里」の運営を引き継いだ岩川さん夫妻(山形県上山市)

切り一面に広がる銀世界の里。観光客向けの山界を、夕陽が包み込む。荘の、もう一つの顔だ。二十数年前に両親が始めた活動を、岩川が妻の智恵(ちえ、34)と受け継いで丸一年になる。

## 欠席の子は誰？

元教師の両親と東京から三十五歳までの男女八人が声をそろえる。「いら山形に移り住んだことだきます」。だが、その後は話が続かない。家は常にかたがたに家族のほのぼのとした空気が流れている。だが、心の病を抱えた人が居た。遊び相手に事欠か淡々と進んでいく。「いかに周りと話して、嫌と感じなかった」

# 心開く食卓夢見て

「いかに周りと話して、嫌と感じなかった」が、大学卒の元教師の両親と東京から三十五歳までの男女八人が声をそろえる。「いら山形に移り住んだことだきます」。だが、その後は話が続かない。家は常にかたがたに家族のほのぼのとした空気が流れている。だが、心の病を抱えた人が居た。遊び相手に事欠か淡々と進んでいく。「いかに周りと話して、嫌と感じなかった」

## 再起



は思いきって妻に相談を持ちかけた。「里を継いでNPO法人にしたい」。いこいの里はこれまで、任意団体として活動を続けてきた。寄付や国からの補助金に制限があり、今後も活動を続けていく上でNPO法人化による経営基盤の強化が必要、と岩川は考えた。

しかし妻は予想以上に反発した。「そんなのできっこない」。妻の念頭にあったのは次男(4)のこと。生まれつき血管の病気で顔に大きな赤アザがあり、郡山の病院で定期的にレーザー治療を受けていた。岩川が会社を辞めれば収入は激減する。「他人を助けている場合じゃない。二児の母親でも、ある妻の、正直な意見だった。」

それでも岩川は説得を続けた。長男として、年がら若い両親のことも気になった。やがて少しずつ妻も傾き始める。看護師として勤務する岩川も、

病院で夫の「転職」について相談した時。「実は私の娘も……」。普段は気がなく接していた複数人の同僚から、子どもの不登校やリストカットなどの問題に悩んでいることを明かされた。一人や二人ではない。「親としてどう接したらいいのか。切実な訴えが心に響いた。誰かがやらなきゃいけないのかも」

二〇〇六年末、岩川は会社を退職。いこいの里の子どもらに食事の世話をするため約九カ月間、居酒屋で働いて調理師免許を取った。そして昨年三月、岩川は妻と二人の息子と山形に戻ってきた。次男が治療を受けられ、妻も納得してくれた。NPO法人化はその二カ月前に達成した。

スキー教室、山の植物観察、雪かき……。若者は毎朝六時過ぎに起床、夜十時の就寝時間まで作業や家事で時間を共にし、協力する。岩川も

一人か二人、欠席者がいるのが引かかった。ある日、担任に欠席する子のことを尋ねると、「一ツク事件など後を絶たない少年犯罪も目に付いた。報道などを通じて知

る加害者の多くは、社会から隔離され自らの殻に閉じこもった若者ら。「里に来る子たちと同じかも知れない」と感じた。入社十年目の春、岩川

られるという。

日本通運などを含む十三社と航空貨物運送協会に立ち入り検査し、関係者の聞き取り調査などを進めてきた。事前通知に対して各社から出される意見などを検討したうえ、

# 日通など排除命令へ

国際航空貨物

果敢委 果敢金 計数十 意円こ

日本通運などを含む十三社と航空貨物運送協会に立ち入り検査し、関係者の聞き取り調査などを進めてきた。事前通知に対して各社から出される意見などを検討したうえ、

「感想や自らの体験談を社会人取材班」までファクス(03-3327-95570)、手紙、電子メール(shakai@okyonikkei.co.jp)でお寄せください。